

# YOKOHAMA ARTSITE

ヨコハマアートサイト おでかけMAP

## 横浜の地域文化を支援するための「ヨコハマアートサイト」助成金

横浜市地域文化サポート事業「ヨコハマアートサイト」は、毎年、横浜市内での芸術文化活動を公募し、助成を行っています。

1件10万円～ **ヨコハマアートサイト2017募集期間**  
2017年3月1日(水)～4月3日(月)

詳細は募集要項およびウェブサイトをご覧ください。  
なお、横浜市の平成29年度予算が横浜市内において議決されることを条件としています。



● 本誌で取り上げた場所



あうたびに、あたらしい  
Find Your YOKOHAMA

最新情報・詳細はこちら <http://www.y-artsite.org/>

ヨコハマアートサイト



# ヨコハマアートサイト

横浜の地域文化を考える・応援する

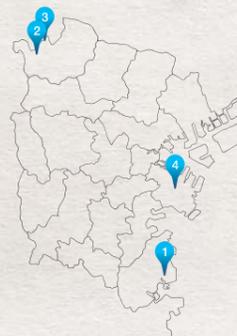


金沢区・アーティストネットワーク「コンパス」会社まるごとギャラリー12016

2017  
Vol.

011

「特集 ものづくりの場所から」



工場や  
工房で  
生まれるものは



1  
「これも使うの？」  
アーティストが  
まちで見つけた材料たち

金沢区。シーサイドラインに揺られ、臨海部を見下ろしていると、四角い大きな建物が並んだ工業用地にさしかかる。この地域を展示空間と見立てて開催されるのがアーティストネットワーク+コンパス「会社まるごとギャラリー」だ。株式会社山陽印刷の有志が中心となり、地域を盛り上げる試みとして自社社屋にて2013年にスタートした。開催を重ねるごとに、少しずつ周辺の企業や大学とのつながりが

生まれ、2016年の開催では4つの工場に作品を展示。ギャラリーツアーも好評を博した。

企画のプロデュースも手掛けるアーティスト・田中清隆さんが当初の様子を振り返る。「このエリアの良さを生かすような、ここならではの化学変化を起こしたかった」。まずは生産の過程でどんな廃材が出ているのからサーチ。インクを拭き取った後のカラフルに染まった不織布やインク缶の蓋、規格外となった金属部品など、魅力的なものも多く見つかった。その上で、廃材利用の経験者ではなく、あえて異ジャンルで活動を行う

アーティストに声をかける。これまでただ廃棄していたものにアーティストが価値を見出していくその過程は、今でも新しく関わる工場の人々に驚かれると言う。

これまでに製作・展示された作品のいくつかは、今でも屋外に設置され、道行く人の目を楽しませている。工業という意味では、企業進出が始まった1978年からずっとものづくりの場であったこの地域。ここには材料があり、過去の作品が並び、次なる作品が生まれるのを待っている。アーティストにとっては、まるで地域全体が大きな工房のようだ。



### 3 自分で生み出す おもしろさ

手押しカンナ、グラインダー、帯鋸盤、集塵機。ずらりと並んだ木工機材の説明をしてきているのは井上和彦さん。ここは、青葉区・寺家木工舎。木工教室「削」の卒業生たちが2008年に設立、共同で運営を行っている工房だ。

メンバーは、第二の人生を楽しむシニア層が中心となっている。それぞれの経験を活かし、手づくりで工房を成長させている。作業機はもちろん、工房の利用予約システムや、各機械と集塵機をダクトをつないだ仕組みもそれぞれメンバーが工夫を凝らし手作りした。「そのプロセスが楽しいんですよ。木工も同じ。完成作品よりも自分で次はこうしてみようって考えるのが面白い」。

この地域では年に一度、寺家木工舎をはじめ、地域の作家やアーティストが活動を発信する「寺家回廊」というイベントを行っている。木工に限らず陶芸や絵画、ギャラリーなどが集まる地域ならではの取組だ。駅周辺の華やかな商業施設から車で15分程度。田畑に囲まれ、豊かな水と緑あふれる環境が作家を惹きつけるのだろう。土地を耕し作物を育てる様子と、工夫を凝らし作品に取り組む姿が二重写しに見えた。



### 4 ものづくりを通して 土地の歴史を のぞき見ている

中区・本牧を舞台とした「本牧アートプロジェクト」でもお馴染み、地元産の白いメリーゴーランド。「メリーゴーランド研究所」を運営するテラミチ健一郎さんは、もともとと広告美術を中心に、手作業で受注生産を行う造形会社を営んでいた。10周年を機に、今までのノウハウを生かして人々を楽しませるようなものをつくりたいと考え、2009年、生まれ育った本牧で移動式メリーゴーランドの研究・制作を始めた。



「思えば昔から我が家は馬に関わる仕事をしていました。意識はしていなかったけど、どこかでつながっているのかもしれないね」。かつては牧場が広がっていたこの地で、曾祖父はジョッキーとして活躍。今も「馬の博物館」には伝説のジョッキーとして記事が残っている。

さらにこの工房は、地域の子どものアトリエとしても親しまれている。「夏は学校の課題工作のためにやってくる子もいますよ。遊具を作っている工房で、子どもたちにもものづくりを体験してもらえると嬉しいですね」。工房内のメリーゴーランドで遊ぶ子どもたちも、いつか、ものづくりの場を通して知らないうちに土地の歴史と触れ合っていたと気づくのだろうか。

P.3左 青葉区・横浜美術大学「鞠祭り」  
P.3中 青葉区・寺屋木工舎  
P.3右 中区・メリーゴーランド研究所

### 2 時には 作業の手をとめて みんなで集まる

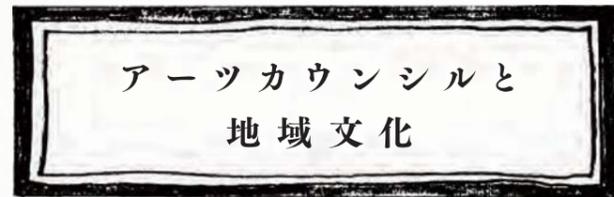
青葉区にある横浜美術大学の工房で、にぎやかに鞠祭りが行われていた。学生が手作りしたというおにぎりやからあげ、卵焼き……たくさんの料理に、お酒(未成年者はもちろんノンアルコール)。紅白幕が飾られた工房に続々と学生が集まる。

鞠祭りとは、11月8日に多く開催される、職人たちが鞠を清めて祝う行事のことだ。クラフトデザイン研究室主任の安岡和彦教授は「鞠祭りは、立冬……寒くなる時期に行うんです。冬になると着膨れしたり、暖房を使ったりするでしょ。だから怪我や事故が多くなる。それで一度工房を掃除するという意味も兼ねているんです。」と語る。

会場では一人ひとりが祭壇に手を合わせ、頭を下げる。そんな姿から、学生のものづくりに対する真摯な想いが見てとれる。

「火を扱うことへの気持ち、そういった意識をつなげていくための行事でもあるんです。また、学生や先生の集まりの場となることで、人間関係の風通しもよくなる。鞠が風を送らないとものづくりはできませんから」。

世代を超え、祈りの尊さが引き継がれる。



【会場】BUKATSUDO(西区みなとみらい) 【ゲスト】佐藤千晴(大阪アーツカウンシル 統括責任者)／佐藤李青(公益財団法人 東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京 プログラムオフィサー)／杉崎栄介(公益財団法人 横浜市芸術文化振興財団 広報ACYグループ担当リーダー プログラム・オフィサー) 【主催】ヨコハマアートサイト事務局

### 5 地域と一緒に 芸術文化を支える手と手

アートと地域の関わりについて考える・交流する場としての「アートサイトラウンジ」。テーマは「アーツカウンシルと地域文化」。アーツカウンシルは、芸術団体への経済的な支援をしたり、文化政策の立案に関わったりと多岐にわたる活動で芸術文化の振興を図る組織のこと。大阪、東京、横浜での取組についてゲストにお話を伺いました。

アートと地域の関わりについて、大阪アーツカウンシルの佐藤千晴さんは「アート寄り、地域寄り」と、それぞれの側につきながら「アート寄りが重要」と話します。「何かを一緒にできるかもと思えるような環境づくりが課題ですね」。

佐藤李青さんは、地域の担い手としてのNPOと共催しているアーツカウンシル東京での取組を紹介しました。

「あるプロジェクトは、ボランティアの結束がとても強いんですが、そこはいい飲み屋さんが多い地域なんです。この文化圏だからこそ育まれてきたものだなと思います」。

「アーツカウンシルの中間支援とは」という議題では、暮らしの中にある芸術文化や、地域の中で活動されている人々とう出会って行くのかという議論に。杉崎栄介さんは、自身の担当するACY(アーツコミッション・ヨコハマ)の主な事業の一つに「相談」があると話します。行政・地域・アートの間を取り持つ役割として「相談者がやってくるのを待つだけではなく、とにかくどんどん現場に出て、あれこれ見に行くことを大切にしています」という言葉には、一同が深くうなづきました。

6 まちに溶け込む  
パブリックアート  
長い歴史のうえに根付く  
住民とアートの関係

(港南区民文化センター ひまわりの郷 副館長) 沼部勝さん

港南区内をまわっていると、地域差がかなりあるなと感じます。ひまわりの郷がある上大岡は、港南区の中でもかなり歴史が古く、コッソツ自分たちで地固めをしてきた人が多く住んでいる印象があります。私もいろいろな場所を歩いてみるのですが、坂や狭い道を見ると「昔こはこういう地形だったのだらう」と歴史を思い浮かべることがあります。一方で港南台地区は、比較的新しく開かれた場所です、きれいに区画整理されてきているまちです。道も新しく整備されていますね。

周辺の通りには、昔、商店がずらっと並んでいたそうです。何世代にもわたりこの土地に住む方達が自治会に参加し、子ども向けのイベントや夏祭りを開催しています。三世代で住んでいる方も多く、家族皆でまちを盛り上げようとしている方も多くいらっしやいます。堅実にまちを活気づけている感じですね。やはり長い歴史のあるまちですから、なんとにか住人にも安定感がある。とても落ち着いている方々が多くいらっ



しやると思います。ですから、まちや同じ地域に住んでいる人々に意識が向くところがあるのかなと思います。

港南区はとても広く、バスがないとなかなか出かけられない……という人も数多くいらっしやいます。そういう人たちに、少しでも色々なものを見ていただきたいと思い、野庭地区センターでくちぶえコンサートを行ったり、日野南コミュニティハウスで琴の演奏会を行ったりしました。こうした公演のニーズはとも高く、200人くらいのお客様が訪れることもありますね。活動を続けるうちに、区民の方から、「こういうイベントをやってほしい」というリクエストが来るようにもなりました。すると、地区センターの方から「自分たちでも事業をやってみよう」という声が上がったんです。そこでスタッフや設備をお貸しするのも当館の仕事です。設備がそろっただけで印象は変わりますし、区民の方からも、「思ったよりクオリティが高くて驚いた」といった声が寄せられました。

ひまわりの郷には、実はアート作品をたくさん展示してあります。館内だけでなく、まわりの地域を含め全19のアート作品が点在しています。中央塔4階のエレベーターロビーには、壁一面に村上隆さんの絵が描かれていますし、センターコートには奈良美智さんの作品が展示されています。このパブリックアート・プロジェクトは1997年に地元の住人の方々が発案、推進したもので、今ではすっかりこの土地になじんでいます。いつも見ている風景のなかに、アート作品が取り込まれている……プロジェクトから20年経った今、区民の方にとってそういう場所になっているといいなと思います。

事務局うろうろ日記



ヨコハマアートサイト事務局は、  
今日も、横浜市内の  
あっちこっちへうろうろしています。

7 12月13日(火)  
センター北・都筑民家園を訪れる。  
こちらはただいま茅の葺き替えのため休館中。「カヤ」というのはスキを含むいくつかの植物の総称だと教えてもらい、びっくり。帰りは、近くのショッピングセンター「港北みなも」にて、すみれが丘小学校とアーティストによる作品展示を覗く。にぎやかで明るい気持ちになる作品たちに元気をもらう。



9 1月14日(土)  
象の鼻テラスにて、「PICTURE THIS:横浜インターナショナルユースプロジェクト」展示のオープニングセレモニー。このプロジェクトは、横浜市在住の外国につながるティーンエイジャーたちが撮影した横浜の写真を紹介するもの。写真を撮ることを通して、自己を見つめ直す機会となったよう。第2回も今年の夏から始まるようだ。



8 12月20日(火)  
横浜でイルミネーションというと、やはり元町・中華街や、みなとみらいを思い浮かべる人が多いのだろうか。しかし、JR鶴見線・弁天橋も負けちゃいない。駅前に広がるイルミネーションは、JFEエンジニアリング株式会社が手がけたもの。まさにイルミネーションの穴場スポットだ。人混みが苦手な人は、是非弁天橋へ行ってみてほしい。



10 1月29日(日)  
緑区民文化センター みどりアートパークにて障害のある人たちと一緒につくりあげる舞台「第三回 表現の市場」へ。ラストは、ミュージカル「ゼロ弾きのゴーシュ〜ぶかぶか版〜」。この舞台を生み出したのは、緑区のパン屋さん「ぶかぶか」に集う人々だ。いつもおいしいパンを作っているスタッフの皆さんも、舞台上で輝いていた。



ヨコハマ  
アートサイトとは

横浜市地域文化サポート事業。地域課題の解決につなげる文化芸術活動をサポートするため、文化芸術の持つ創造性をコミュニティやまちの活性化と結びつける文化芸術活動や、横浜の個性ある文化芸術を市内外へ発信する活動を広く公募し、支援する事業です。

事務局・お問い合わせ

ヨコハマアートサイト事務局  
(STスポット横浜、横浜市文化観光局、横浜市芸術文化振興財団)  
〒220-0004 横浜市西区北幸  
1-11-15 横浜STビル 208  
(NPO法人STスポット横浜  
地域連携事業部 内)  
TEL:045-325-0410  
FAX:045-325-0414  
WEB: <http://y-artsite.org>  
MAIL: [office@y-artsite.org](mailto:office@y-artsite.org)

@Y\_Artsite

ヨコハマアートサイト

ヨコハマアートサイトに関するを中心に、横浜市内のさまざまな地域文化活動について発信します。

季刊ヨコハマアートサイト Vol.011

発行 ヨコハマアートサイト事務局  
編集 NPO法人STスポット横浜  
テキスト 小川智紀 池田友実  
沖崎美海  
デザイン 相澤事務所  
撮影 福井裕子  
印刷・製本 合資会社 三島印刷所  
発行日 2017年3月31日

季刊誌についてのご意見・ご感想もお待ちしております。